

### 昔の時刻と今の時刻

古い史料を読む時に、昔の時刻が一体何時を指すのだろうと思うことがありませんか。今回は、江戸時代の時刻と現在の時刻の関係についてお伝えします。

江戸時代には、時の呼び方に二通りありました。一つは十二支法で、右図の一番外側に示したように、1日を12等分して、2時間毎に子刻、丑刻、寅刻のように十二支で呼んでいました。例えば、子刻は現在の午前0時を中心に午後11時から午前1時までの2時間を指していました。

もう一つは九ッ、八ッ、七ッなどの数で呼ぶ方法です。現在の午前0時が九ッ時、午前2時が八ッ時と、時間が進むにつれて数が減り、四ッ時の次がまた九ッ時となります。時間が進むのに数が減っていくことが不思議に感じられますが、中国の陰陽の考え方では9が縁起の良い数と考えられていたため、9の倍数、つまり9、18、27、36、45、54となるところを、十の桁を省略して、九ッ時、八ッ時、七ッ時などとなったそうです。

もともと1日を12等分して時を示す定時法が古くから使われていましたが、江戸時代には不定時法が使われるようになりました。これは、夜明けを「明け六ッ時」、夕暮れを「暮れ六ッ時」として、昼と夜をそれぞれ6等分する方法です。夜明けと夕暮れの時間は季節によって違いますので、夏は昼の一刻が長く、冬は夜の一刻が長くなります。そこで二十四節気で区切り、半月ごとに時の鐘を鳴らす時刻を変えていました。

具体例で見ていきましょう。初めの二つは十二支法、後の二つは数呼び法の例です。

「愛媛県気象史料」(1952年)には、天明4年(1784)の落雷について「正月元日夜子刻雷火にて御本城焼失卯刻鎮火す」と記されています。元旦の子刻(午前0時前後)に落雷で松山城が焼失し、卯刻(午前6時前後)に鎮火したことが分かります。

高知県の「南国の歴史」(1989年)には、安政元年(1854)11月の地震について「初め四日の辰の刻に強震があつて、津浪が起り(略)五日の申刻に又大震りがあつた。」と書かれています。4日辰刻(午前8時前後)に東海地震が、その約32時間後の5日申刻(午後4時前後)に南海地震が起こったということです。

徳島県の「石井町史下巻」(1991年)には、天保10年(1839)8月の台風について「八、九日昼夜大降り晩九ッ時より大風吹き出し、十日朝より出水。」と記されています。晩九ッ時は午前0時ですので、10日0時頃から強風が吹き出し、朝から出水ということです。

香川県の「物語大野原開村史」(1949年)には、慶安元年(1648)の大雨について「二月七日、大雨のため暮六ッ時分、井関池の大うてめ十五間、小堤二十五間破損」とあります。暮六ッ時(午後6時頃)に井関池の余水吐や堤が破損したことが分かります。

四国災害アーカイブスを利用する時にも、昔の時刻と今の時刻の関係を示す上図は参考になると思います。なお、昔の時刻は現在のように何時何分というような細かな時刻を表すものではありませんので、せっかちな現代人が古い史料を見る時には少し心にゆとりが必要でしょうね。

昔の時刻(外側の白色部分)と今の時刻(内側の水色部分)

